１．実施概要

（１）日時：平成２４年１１月２０日（火）　１５：００～１７：３０
（２）場所：高岡市生涯学習センター（ウィング・ウィング高岡）４階大ホール
（３）テーマ：「歴史・文化資産を生かしたまちづくり」
（４）進行

15:00～15:05　開会
・開会の挨拶　高岡市長　髙橋 正樹
15:05～15:15　趣旨説明
・国土交通省都市局まちづくり推進課官民連携推進室長　佐藤 哲也
15:15～15:45　基調講演
・富山大学芸術文化学部教授 古池 嘉和
15:45～17:25　パネルディスカッション
・コーディネーター：古池 嘉和
・パネリスト：越前市長 奈良 俊幸、白河市長 鈴木 和夫、
大垣市長 小川 敏、㈱蔵のまちスクエア代表 菅野 克志
高岡市長
17:25～17:30　閉会の挨拶
・内閣府地域活性化推進室参事官 佐竹 克也
17:30　閉会

２．開会の挨拶

- 高岡市では中心市街地活性化基本計画を作成し、第二期目に入っている。第一期では新幹線開業を控えた新高岡駅周辺の整備、また現在の高岡駅周辺の整備とそこから連なる中心商店街のいろいろな活性化についての取組みを進めてきた。
- 第二期では、歴史都市を大きなテーマとして、歴史や文化を大きな柱とした中心市街地の再生に現在取り組んでいる。富山県では唯一、歴史と文化、そして都市機能が融合したまちだと思う。そういう高岡市ならではの特性を生かしながら中心市街地の再生、活性化に取り組んでいきたい。歴史や文化がまちの顔としての中心市街地にどういうふうに活かして行けるか、議論を深めていきたいと思う。

３．趣旨説明

- ご存知のように、中心市街地活性化については平成１８年にまちづくり三法ということで法が改正され、ちょうど６年が経過した。これまで全国１０７の市で基本計画が策定されて、ちょうど計画の終了時期を迎え、このシンポジウムは、先進的な取組み事例の紹介や各地の

活力向上につながるような情報を発信して共有しあうことを目的としている。全国２１市、関係４府省、地元関係者とが共同で「日本の元気は地域から」をテーマに開催している。

● ７月に策定された日本再生戦略でも重点施策のひとつとして、集約型のまちづくり、次世代型生活への対応などが掲げられており、現行施策の検証を行うこととされている。本日、創意工夫にあふれる取組みを幅広くご紹介いただき、国としても今後の検証作業に活かしてまいりたいと考えている。本日は歴史文化をテーマとしているが、中心市街地はまちの方々のアイデンティティーでもあり、大きな視点になるのではないかと考えている。

４．基調講演

≪歴史的界隈の構想力～固有の価値を育むまちづくり～≫

● 時代に向き合いながら、これからの資源を活かして新しく歴史的界隈を構想していかなければいけない。ただ、同時にまちづくりが進んでいかないとコミュニティ形成ができない。ジェイコブさんというアメリカの思想家の言葉で「新しいアイデアには古い建物が必要だ」がある。新しいものを生みだす時、そこの地域が長く育んできた建物、まち並み、雰囲気、風土というものの中で生まれてくるものだということ。こういうものを過去から現在、未来へどうつないでいけばいいのかが問われていると思う。

● 歴史的界隈は、いくつかの制度を導入しないと守りきれない。代表的な例は文化財保護法の中の重伝建と呼ばれている保存地区の制度だ。ただまちづくりまでは担保されないので、保存されたまち並みをどう活かすかが重要になってくる。金沢には、「こまちなみ保存条例」があり、まち並みまではいかないが、それをなくすと歴史的な雰囲気が壊されるというものを保存している。

● 新しいコミュニティをつくる、新しい人を迎える、これは来る方からすると心細い。いかに広く温かく迎え入れるかが多様性や創造性にとって大事なことではないか。そういう意味で大学は、毎年若い人が新しくコミュニティの中で暮らしたり活動したりするので、日常的にそういうことが増えればいいと思う。空き工場や空き家などを創作の場にしたいというアーティストや職人さんも多いので、寛容に受け入れたい。多様な人たちとコミュニケーション

を楽しむことが、まち並みや建物を生かすアイデアといえる。また新しい生業や消費の場も形成されてくるのではないか。

- まちの中には歴史や文化が凝縮されているので、いかようにも編集して楽しめる。それらをどう構想して、どう楽しむか。その中から新しいアイデアが生まれていくのではないか。お互いに支えあいながら新たな仕事の場をまちの中に呼び込むことが必要なのではないか。食、住が分離してしまったものを、もう一回近接してまちの中で働いて暮らしていく。また楽しんで遊んで、ということが生まれてくるようなイメージができないものかと考えている。

５．パネルディスカッションの概要

- （コーディネーター）本日は、まず各市長さんに事例をご紹介いただき、その後やりとりをさせていただきながらテーマを掘り下げていきたいと思う。
- （大垣市長）中心市街地の空洞化が進行する中、平成１０年度に最初の中心市街地活性化基本計画を策定し、各種施策に取り組んだが十分な成果が得られず、平成２１年度に新たな基本計画が認定された。「元気ハツラツ市」などのソフト事業の他、奥の細道むすびの地周辺整備や大垣駅南街区再開発事業などのハード事業を推進している。居住者にも観光客にも商業者にとっても魅力的なまちづくりを推進し、歩いて楽しめる中心市街地を目指していきたいと考えている。
- （白河市長）平成２１年に県内第一号として中心市街地活性化の認定を受けた。コンセプトは「歴史・伝統・文化が息づく市民共楽の城下町」。現在、特に震災で最も被害を受けた小峰城の修復に取り組んでいる。他に白河駅前周辺の再生、中町の蔵を活用した店舗のテナントミックス事業、また、定住人口を増やすための第一弾の中心市街地共同集合住宅事業、さらに被災した蔵を修復するための補助事業などを行っている。蔵の景観はりっぱな公共物という考え方で説得した。今、白河は歴史まちづくり計画と２本立てで進めているところである。
- （越前市長）平成１９年に認定をいただいた。基本理念は「越前国府１３００年の歴史と文化が香る安らぎのまち武生」。“まちなか居住の促進”では、民間優良共同住宅などの整備。“賑わいの創出”として蔵の辻での賑わい市や昭和の花嫁行列、屋台まつりなど、伝統産業や歴史資源と連携したイベント、“まちなか観光の推進”では「観光・匠の技案内所」、「まちなかプラザ」の設置や回遊コースの整備。“美しい景観の形成”では伝統的建築物の保存、“訪れやすい中心市街地”では、ＪＲ武生駅にバリアフリー化の跨線橋の設置、パークアンドライド駐車場や、短時間無料駐車場の整備などを行った。この他歴史と文化の遺産を活かしたまちづくりに取り組んでいる。

- （高岡市長）文化資産の保存と活用の目玉事業として、吸引力のある観光スポットの御車山会館を

つくろうとしている。またお城の国指定史跡、金屋町の重伝建への指定を目指している。さらに国宝瑞龍寺のライトアップ、山町筋の土蔵づくりフェスタ、金屋町の金屋町楽市、高岡大仏周辺のたかおか朝市などを実施し、歴史文化のあるまちににぎわいを創出していく。回遊するような施策として、新幹線の駅から金屋町まで歩いて楽しめるように、たかまちプロムナード事業などを実施している。まちなか居住では、共同住宅への支援、またにぎわいの創出では、駅周辺での広場の整備やステーションビルの改築、通年でのイベント開催、ドラえもん列車の運行やギャラリーの展開などを実施している。歴史まちづくり計画と中心市街地活性化を表裏一体として進めているところだ。

- （菅野代表）山町筋を中心としたまちづくりをしてきた「町屋散歩プロジェクト」は、北陸新幹線の開業、御車山会館の竣工という高岡市の発展の大きなきっかけがあり、どのようなまちづくりの基礎ができるかを考えていくために立ちあげたもの。源氏香、花、パワースポットをテーマ、キーワードにして活動している。観光客をもてなす施設の誘致、観光客数の増加目標なども設定している。一気にいろいろ手を広げるのではなく、特定地域をしっかり固めてから周辺地域に広げていくという考え方で活動している。
- （コーディネーター）いかにして全市的に価値を共有するか、合意形成を図っていくかでご苦労されていると思われるがそのあたりを伺いたい。
- （大垣市長）戦災で焼けたところは割り切ってどんどん新しいまちづくりに切り替えていく、一方では大垣城やむすびの地、昔からの船町、赤坂宿と古いところはしっかり守って行こうと考えている。ただ、まち並みが揃いにくいのが難点。整備委員会をつくってやっているのが実情だ。
- （白河市長）平成１７年に１市３村で合併。昭和３０、４０年代の記憶がある方とそれ以降の方ではやはりギャップがある。市の顔になるのは新白河ではなく、歴史や伝統のある白河なんだということをずっと訴えてきた。無力感が白河市内を覆っていたが、まちづくり会社を中心に中活計画の事業を実施することで雰囲気が醸成されつつある。それが大事だと思う。
- （越前市長）人口減などの背景を見ると、既存ストックを活かしたまちづくりや中心市街地の施策を急ぐことは不可避だと考えている。地域住民と危機意識を共有しながら、協働のまちづくりを進めることがポイントかと思う。それぞれの地域のコミュニティが有機的に維持できるまちを目指し、コンパクトなまちづくりを進めていくことで理解を得たい。
- （高岡市長）高岡市の地域資源をもとに人を呼び込んでいくことは必要だろう。単にモノを売ったり買ったりではなく、まちが提供できる空間や時間を楽しんでいただけることを価値として消費していただくということだと思う。日常的に何かが行われていて、見に行ったり参加したりする営みが必要なのではないか。

６．閉会の挨拶

- このシンポジウムは何か結論を出すというものではない。本日は皆さまに何を感じられたのかを持って帰っていただければと思う。全国には１、７００の市町村があるが、中心市街地活性化に取り組んでいただいているのは１０７で、１０％にも満たない。そのなかで４つのま

ちの市長にお話を伺ったが、いずれもたいへん先進的に知恵を絞り努力をされている市とご理解いただきたい。

- まちなかが寂しい状況の中、「日本の元気は地域から」をキーワードにしているが、地域とは地域住民のこと。５年１０年で最終ゴールに達するのは難しいかもしれないが、ぜひ住民の方々に参加してほしい。行政だけではなかなかゴールに達しえない。無力感を打破してまちを元気にしていただき、イベントがあったらぜひともご参加いただきたいと思う。本日盛り上げていただいた皆様に御礼申し上げてご挨拶とさせていただく。

７．閉会